

崩しを用いた建築

空間のズレが生み出す関係性

指導教員 吉松秀樹教授 印

9AEB2206 清水 佑基

1. 崩しへの興味

書道、陶芸、絵画において、整った形ではなく、雑さの中にある微妙な崩しに興味を抱いた。



書道において崩しとは行書や草書を意味する。しかし、型にはまった崩しではなく、原形を残しつつ型を崩した文字に親しみを感じた。

1_2 崩しに感じた親しみ

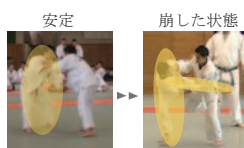
人の表情や体勢が崩れた状態には親しみを感じた。表情の場合、一部が崩れるだけで、感情や状態が表に伝わり、中身がある程度推測できる為であると考えた (fig. 1)。



(fig. 1) 崩しの親しみ

1_3 柔道における崩し

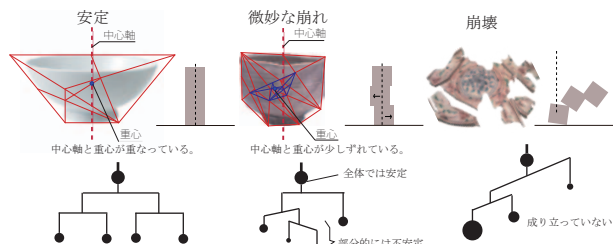
投げやすいように、相手の重心を(両方または片方の)足で形成される「最大安定保持範囲」の辺縁ギリギリに移すこと (fig. 2)。



(fig. 2) 柔道の崩し

2. 微妙な崩れとは

微妙な崩れとは、原形を想起できる可能な範囲で安定や不安定になる瞬間の状態を示し、部分的には崩れているながらも全体として安定していることを示す (fig. 3)。



(fig. 3) 微妙な崩れの位置

3 建築における崩し



モザイクの家 周りが家型の住宅が多く、この傾いた住宅があることによって敷地の牽制力がなくなり、愛着がわく。

西田幾多郎記念哲学館 壁を少し傾けることによって、圧迫感や開放感を与えたり、水平感覚を崩される。

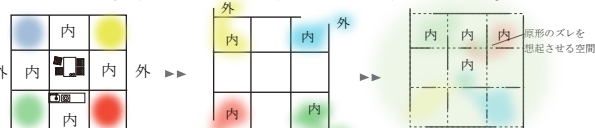
house N 外と内の輪郭は保たれているが大きな開口を開けることで内と外の輪郭を微妙に崩している。



(fig. 1) 崩しを用いた作品

4. 崩しからの設計

建築空間における原形を、垂直水平で構成されたグリッド空間と設定し、原形を想起させる程度に建築、空間の輪郭、内外関係を崩すことで、空間同士の情報を認識しやすくなり、親しみのある崩れた空間をつくる。

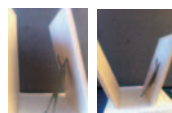


仕切られた均一な空間

輪郭を崩す

空間認識が崩れていく

断面においては、圧迫感のある空間と開放的な空間を壁の微妙な崩れによって操作する (fig. 4)。



(fig. 4) 壁の崩しの操作

また、輪郭を残しつつ壁の高さや幅を変えることにより空間を操作し、様々なアクティビティを与える (fig. 5)。



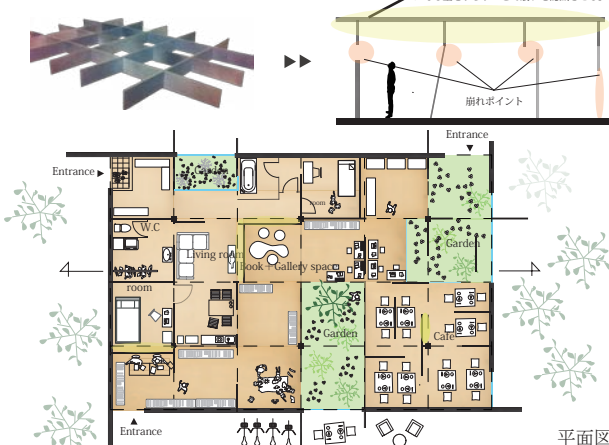
(fig. 5) 壁の崩しの操作

5. 微妙な崩れを用いて空間を認識させる

崩れの特徴を用いてギャラリー+ブックカフェを設計する。内と外、部屋と部屋、庭と庭とが空間を崩すことでそれぞれが混ざり合い、建築が展開されてゆき、様々な環境が生まれていく。

3m×3mのグリッド空間を原形の形とする。

原形となるグリッドを骨格として残し、下部にある壁をずらすことで崩れを認識させる。



平面図



断面図



模型写真